

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：28002

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12264

研究課題名(和文) 要介護高齢者が組織的コミュニティへの参加を継続する支援方法の提案

研究課題名(英文) Proposed method for helping older adults requiring long-term care to continue participating in communities

研究代表者

田場 由紀 (Taba, Yuki)

沖縄県立看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：30549027

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高齢者が要介護状態になってもこれまで培ってきたコミュニティへの参加を継続する支援方法を提案することである。方法は、看護職に対する半構造化した面接調査および参加観察である。要介護高齢者に対する看護職者による支援方法は、アセスメントでは、生活歴や生活支援を通して把握した重要他者への思い、かわりなど、要介護者にとっての重要なコミュニティを把握していた。支援の実施では、家族、他の専門職、地域住民などの関係者と協働していた。高齢者が要介護状態になっても重要なコミュニティへの参加を継続する支援方法は、高齢者にとっての重要なコミュニティのアセスメントと多様な関係者との協働であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

要介護高齢者が所属できる集団をつくり、コミュニティ形成の場を作ることに加えて、要介護高齢者が所属してきた、あるいは新たに所属することになる集団のなかで要介護高齢者が人間関係に働きかけられるよう、看護職者が意図的に支援することは、要介護状態の高齢者がコミュニティに参加することを助け、個々のケアコミュニティを形成すると考えられた。したがって、要介護高齢者に対する個別支援の立場から地域包括ケアシステムの構築を推進する役割を担える可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to propose a method for supporting older adults who have come to require long-term care, so that they can continue participating in communities to which they had previously contributed. Semi-structured interviews with nurses and observation of actual practice were conducted to reveal how nurses help older adults requiring long-term care. Nurses ascertained which community was important to the older adults requiring long-term care by using an assessment to gaining understanding of their feelings toward and their relationship with the people important to them based on their life history and by providing support to them. Nurses provided support in cooperation with the family members of older adults requiring long-term care, as well as other professionals and community residents. The method for supporting older adults requiring long-term care involved ascertaining which community was important to them and cooperating with various types of professionals.

研究分野：高齢者看護

キーワード：要介護高齢者 コミュニティ 生活の継続性 協働

1. 研究開始当初の背景

人はさまざまな集団に参加し、そこでコミュニティを形成している。年齢を重ねるごとにこれらのコミュニティから離脱、または新たなコミュニティの形成を繰り返す。コミュニティについて、菊池(2003)は、「コミュニティとは、地域性と共同性を備えた社会であるがそれで、今日地域で生活する人々の間に何らかの共同の営みや絆が存在すれば、それをコミュニティと見なすのである。」と述べている。高齢者の場合、子育てや職業生活を通して形成してきたコミュニティからは離脱を余儀なくされ、新たな集団や関係に参加しコミュニティを形成することが要求されるだけでなく、要介護状態によって、これまでに形成したコミュニティへの参加が継続できない、つまり、他者との共同の営みや、それを通じた絆の存在を確認する機会が確保しづらい状況が推察される。

コミュニティと高齢者との関係について、高齢者の社会的孤立の背景に、家族や地域社会の脆弱化というコミュニティの崩壊が指摘されている。河合(2009)によれば、現代の高齢者は、世帯構成が大きく変化した中を生きている。自らの青年期・壮年期の時代は、7割が三世帯同居世帯であったにもかかわらず、自らの老年期は、半数以上が単身あるいは老夫婦と言う高齢者のみ世帯となり、家族との接触が弱い。また、現代の就労は、労働者の地域移動が激しく、生活拠点となる地域にとどまることを妨げることが重なり、高齢者の孤立を生む現代社会の構造的課題と述べている。このように労働中心の社会経済の構造は、労働や経済活動に参加していない高齢者にとっては、現代社会のありようが、家族との関係、地域住民との関係を断絶し、他者とのつながりや絆、すなわちコミュニティを維持・形成しづらくしていると言える。

森下(2012)は、コミュニティの要素として(共通の目的、構成員の集会的活動、帰属意識)をあげている。社会政策では、コミュニティをつくる、強化することを志向し、様々な実験的取り組みを行っている。高齢者に限れば、老人福祉センターやシルバー人材センターなど趣味、ボランティア、就労など活動の場づくりの支援、介護予防教室など健康づくりの支援、患者会・家族会などネットワークづくりの支援などがある。これらは、高齢者の主体性を前提としており、目的を共有しやすいこと、集会的活動であること、帰属意識を有しやすいことにつながりや絆の生成に貢献すると言える。他方、活動の目的が限局していることで、要介護状態にある高齢者は排除されやすい。そこで要介護高齢者の参加の場として、通所系サービスなど集団に提供される介護サービスがある。このような社会政策としてコミュニティをつくる、強化する取り組みは、高齢者の孤立予防につながる一方で、自立高齢者と要介護高齢者の間でコミュニティを分断するという矛盾を含んでいる。

ところで、高齢者ならびに要介護高齢者について、コミュニティの維持・形成を支援する活動は、高齢者が、あるいは要介護高齢者が所属できる集団をつくることだけなのだろうか。研究者らは、ひとり暮らし要介護高齢者が、日常生活に必要な支援を獲得するために、フォーマルサービスだけでなく、インフォーマルサポートを含めた社会資源を活性化し、活用している実態をストレングスの観点から明らかにした(田場ら, 2014)。そのなかで、要介護状態にある高齢者は、ひとり暮らしを維持、継続するために“主体性が発揮できる人間関係を形成し維持する力”と“新たな人間関係を形成する力”を発揮していることを見出した。このことは要介護状態にあっても高齢者自身が自ら人間関係に働きかけ、コミュニティに参加できることを示唆していると考えられる。以上のことから、要介護高齢者が所属できる集団をつくり、コミュニティ形成の場を作ることに加えて、要介護高齢者が所属してきた、あるいは新たに所属することになる集団のなかで要介護高齢者が人間関係に働きかけられるよう、看護職者が意図的に支援することは、要介護状態の高齢者がコミュニティに参加することを助け、個々のケアコミュニティを形成すると考える。したがって、要介護高齢者に対する個別支援の立場から地域包括ケアシステムの構築を推進する役割を担えると考えられる。

以上のことから、要介護高齢者がこれまで所属してきたあるいは新たに所属する集団の人間関係にねざしたコミュニティを維持または形成し、その参加を継続できる支援方法を看護職者の実践から提案することは、個別支援を通して地域包括ケアシステムを構築する看護の役割に示唆が得られると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、高齢者が要介護状態になっても、これまでに培ってきたコミュニティへの参加を継続する支援方法を提案することである。我が国の高齢者施策は、高齢者の心身機能に応じた参加の場を提供する基盤を築いてきた。これらは横断的な視点で見ると、高齢者の多様なニーズに対応する重要な取り組みである。しかし、ひとりの高齢者の生活の継続という縦断的な視点で見ると、高齢者は心身機能が変化し要介護状態になると、参加の場の移動を余儀なくされる。高齢者にとって馴染みの人とのつながりが健康や生きがいに影響することから、要介護高齢者が培ってきたコミュニティへの参加を継続できる支援方法の提案が必要である。

3. 研究の方法

1) 第1段階：要介護高齢者のコミュニティの維持または形成のための支援方法の文献検討

研究素材は、研究者らの過去の研究の中から、要介護高齢者への看護職者の支援に関する研究を選定し、その公表内容(学会発表、論文投稿)から看護場面を取り出した。看護場面について、“要介護高齢者のコミュニティの維持または形成に寄与した看護実践とは何か”の視点で

分析し、高齢者のコミュニティの維持または形成のための支援方法について整理した。以下、引用した看護場面を「 」、場面から取り出したキーセンテンスを“ ”、サブカテゴリーを《 》、分類を【 】で示す。

2) 第2段階：要介護高齢者のコミュニティを維持または形成する実践の特徴

研究参加者は、ネットワークサンプリングにより把握した。研究者らがこれまでの研究活動や教育活動、社会貢献活動を通して把握した高齢者へのケア提供者のうち、要介護高齢者のコミュニティの維持または形成に寄与した実践をしていると把握した専門職者を研究参加候補者とした。研究の主旨と内容を説明し、研究への参加は自由意思によること、個人情報保護されることを説明し、研究参加への同意を得た。データの収集は、研究者らが把握した実践について、実践の時期、きっかけ、ケア提供者の意図、実施内容、要介護高齢者や関係者の反応を自由に語ってもらった。語りの内容は、研究参加者の許可を得てICレコーダーに録音または面接調査用紙に記録、面接終了後に逐語録を作成した。

データの分析は、逐語録から実践場面を作成し、“要介護高齢者のコミュニティの維持または形成に寄与した実践とは何か”の視点で分析し、要介護高齢者のコミュニティの維持または形成する実践の特徴を導いた。なお、本研究は研究者の所属する大学の研究倫理審査委員会の許可を得て実施した（承認番号：17017）。

以下、引用した実践場面を「 」、場面から取り出したキーセンテンスを“ ”、サブカテゴリーを《 》、分類を【 】で示す。

3) 第3段階

第1段階と第2段階の結果から、要介護高齢者のコミュニティを維持または形成するための支援方法を検討した。

4. 研究成果

1) 要介護高齢者のコミュニティの維持または形成のための支援方法の文献検討

要介護高齢者のコミュニティの維持または形成のための支援方法では【看護サービス由来のコミュニティの形成支援】、【つながりによるケアコミュニティの形成支援】があった。

(1) 看護サービス由来のコミュニティ形成支援

引用した看護場面の分析例を示す。「援助者は、訪問時の玄関先で事例から「今日は帰っていい、どうせあなたは何もできないんだから・・・」と怒りをぶつけ荒れたが、それに従い帰ることはせず、援助者は「申し訳ありませんでしたね・・・」と怒りを受け止めつつ、働きかけを続けた。その結果、事例は援助者に対し「不安で眠れない」こと、「睡眠不足でイライラしている」ことを打ち明け、訪問終了時には援助者に対し「ヘルパーは生活の杖だよ」と語った。」(田場ら, 2010) について、“不満や怒りをぶつける要介護高齢者へ感情表出を受け止め、フェルトニーズに向き合う態度を示す”というケア提供者として認められるための働きかけ をしており、《ケア関係のつながりづくり》の実践があった。また、「地元の看護職者や家族が、高齢者に立ち上がりをうっちゃんとうという方言で促している場面に繰り返し遭遇した。観察を通してこの地域の高齢者にはこの表現が伝わりやすいと確信したことから（方言を知らない）自分もその方言をケアに取り入れた。期待通り、高齢者の反応はスムーズなので、いい言葉を覚えたと思えるし、高齢者にわかりやすく伝わりやすいと実感している。」(田場ら, 2019) について、“要介護高齢者になじみの方言をもちいて親近感をもたせる”というケア提供者としてなじみになるための働きかけ をしており、《ケア関係のつながりづくり》の実践があった。

(2) つながりによるケアコミュニティの形成支援

引用した看護場面の分析例を示す。「(入院中の高齢者が)ベッド上で祈りを捧げることは、病気を治したい一心で仏前に拝む代替行為と理解していたので、高齢者の邪魔にならないよう気をつけてきた。しかし、その行為を気味が悪いと訴える入院患者が出てきたので、苦情がでるたびに地域の慣習として説明し理解を求めた。同室者の合意が得られないときは、病棟全体での検討事項として相談を持ちかけ、看護師同士でアイデアを出し合い耳の遠い高齢者や、拜みが受け入れられる人の部屋へベッドを移動した。」(田場ら, 2019) について、“要介護高齢者の習慣化された行動が入院患者に受け入れられるよう話し合う”という入院環境になじむための人間関係づくり をしており、《ケアし合う仲間づくり》の実践、“要介護高齢者が同室の入院患者に受け入れられていないことを問題提起する”という病棟を巻き込んだ肯定的な患者関係への取り組み という《ケアをつくる仲間づくり》の実践があった。また「(診療所)看護師は、(要介護高齢者の)異常の早期発見が必要であると考え、売店の定員に、事例が買物に来る時にはむくみの状況観察を依頼した。店員は症状を診療所へ電話で伝えてくれ、道中で出会ったときにも報告してくれた。店員からの勧めで受診し以上の早期発見につながったこともある。」(美底ら, 2016) について、“日常生活で要介護高齢者の症状を観察できる仲間をつくり見守る”という安全に生活するための見守る目の育成 をしており《ケアの担い手増やし》の実践があった。

2) 要介護高齢者のコミュニティを維持または形成する実践の特徴

要介護高齢者のコミュニティを維持または形成する実践は、【コミュニティに対するニーズ把握】、【コミュニティへの参加を支援する方法】、【コミュニティへの参加がもたらす成果】があった。

(1) コミュニティに対するニーズ把握

【要介護高齢者のコミュニティに対するニーズ把握】では、《つながりへの思いを共有》、《つながりへの思いを醸成》、《馴染みの中に新たな“その人らしさ”を期待》、《体調不良がもたらすつながりへのあきらめを払拭》、《つながりを試して“その人らしさ”を発見》があった。以下に実践場面の例を示す。

『過去に、行政が支援する要介護高齢者への独自サービスとして、要介護状態になり島外の施設に入所し転居してしまった住民が、伝統行事の時期に帰省するふるさと訪問事業があった。しかし、施設の高齢化や要介護度の重度化、施設職員の人員不足で途絶えている。日ごろから問題意識を抱えていたが解決の糸口は見いだせなかった。あるとき島の介護事業所でボランティアを担う住民が、ふと「こちらから、(島外の)施設へ出かけて行って、入所している住民らと交流したいね」と漏らし同意を求めた。解決の糸口が見いだせなかった問題が解決できそうに思えたので、あいづちで流さず「出かけたらいね」と応じた。その住民は、「ほかの高齢者たちとも、よく、施設にお見舞いに行きたいねって話しているよ」と日ごろ住民同士で交流したい思いを確認しあっていることを打ち明けた。わたしは問題意識をもっているのは自分だけではないことに気づき、賛同者が得られると思ったので、介護事業所や高齢者たちへの提案方法を探った。』について、「住民のなにげない語りから施設入所で途絶えているつながりへの思いに気づ(いた)」き、重要他者への思いを把握し(た)、《つながりへの思いを共有》した。また、「住民のつながりへの思いが解決の糸口になると確信し(た)」し、課題解決の仲間と認識し(た)、《一緒に取り組む仲間》とした。さらに「住民が漠然と抱えている感情を具体的な願望の表現にしてフィードバックした」ことで、感情から願望の表出を助け(た)、《つながりへの思いを醸成》していた。

『70代で通所リハビリ事業所のパートをしていたヘルパーさんが、自宅で転倒し骨折してしまっ。入院手術後、介護保険の利用について相談にのってほしいと言われ、相談がてら、お見舞いに出かけた。これまで人の世話をしてきた人が介護される側になると落ち込むだろうと思ったので、励ますために「リハビリしてまた仕事復帰してね」と声をかけた。本人は「本当に戻れますか？私雇ってもらえますか？」と聞いてきたので、経済的に困っていない彼女が働きたい思いが強いことに驚いた。その場では驚いたふりはせず、「待っているから頑張ろう」と声かけした。折を見て、働きたい理由を聞いてみたところ、これまで語られることのなかった過去の辛かった体験を表出し、その辛かった自分を支えてくれた社会に恩返しきれない思いを初めて知ることになった。』について、「なじみの関係にあっても表出されなかった思いに敏感に反応し(た)」、なじみの関係者であっても新しい側面を意識し(た)、《馴染みの中に新たな“その人らしさ”を期待》した。そして、「要介護高齢者が維持したい社会への役割を理解し(た)」、要介護高齢者の見えない重要な他者を知ったことで《つながりへの思いを共有》していた。

(2) コミュニティへの参加を支援する方法

【コミュニティへの参加を支援する方法】では、《なじみの関係を感じる中での意思表示を喚起》、《つながりへの関心を引き出し》、《自己への信頼を醸成》、《重要な他者への貢献をフィードバック》、《当事者の変化を重要な他者と共有し促進》、《わらしべ長者の発想で仲間づくり》があった。以下に、実践場面の例を示す。

『透析が実施できない島で、透析をせずに最期まで過ごすことを望んでいる高齢者が、腎不全の症状で診療所の受診を繰り返すので、診療所医師は、そのたびに治らない病であること、診療所では症状の苦痛は軽減できるが、今後徐々に悪くなることなど、予測される経過を伝え、治療について、本人に選択するよう意向を確認していた。身体症状の苦痛から希望する暮らしについて自信がなくなっていると察したので、体調が回復し症状が落ち着いてから決めることを提案し、受診日以外の体調がよい日に会えるよう散歩コースを巡回した。売店で談笑中に声かけすると、自ら「透析はしないよ」と笑顔で語った。』について、「当事者の体調不良が前提となる医療者のフィールド(診療所)ではなく、要介護高齢者のフィールド(生活の場)での対話に努め(た)」、「その人らしさ」の表現される環境に配慮し(た)、《なじみの関係を感じるなかで意思表示を喚起》していた。

『ひきこもりで活動を拒んできた要介護高齢者が、ふれあいサロンに慣れ始め、送迎時に参加を拒否することがなくなってきたことを把握したので、サロン参加時の様子を見に行った。グラウンドゴルフやゲートボールなど、活動性の高いメニューには参加しないが、折り紙や絵を描くことなど、手を使う作業は気に行っているようであった。また自分が気に入らないメニューの時は、自らノートに何かをメモするほか、絵を描くなど、自分なりの過ごし方ができる人だとわかった。得意なこと、好きなことを自覚し主体的に取り組めると感じたので、看護師が送別会に使用するイラスト製作や、健康教育のための絵本の挿絵を依頼してみると喜んで引き受けてくれた。成果物をサロンの高齢者やスタッフに示し、喜ばれ、敬意を表されると笑顔を見せ、人とおしゃべりを楽しむようになっていた。』について、「得意を見つけ看護職者の仕事や役割への協力を依頼し(た)」、他者のための役割を担うことへの反応を確かめ(た)、その良い反応から《つながりへの関心を引き出し》ていた。また、

“看護職者への貢献をスタッフやサロンの高齢者らに伝え本人へのフィードバックを促し、得意の自覚を強化(した)”することで、つながりのなかで役割を担う自信をつけ(た)、《自己への信頼を醸成》していた。

(3) 要介護高齢者のコミュニティを維持または形成する看護実践の特徴

【コミュニティに対するニーズ把握】と【コミュニティへの参加を支援する方法】は、《重要な他者に求められる喜びの実感》、《あしたの希望と生きる活力》、《“その人らしく”生ききる喜び》など【コミュニティへの参加による成果】をもたらしていた。

要介護高齢者のコミュニティを維持または形成する実践の特徴は、要介護高齢者のコミュニティに対するニーズ把握から看護目標を導き、その達成のために要介護高齢者、および要介護高齢者にとっての重要な他者、専門職との協働で活動し、その成果として、当事者の生きる喜びや生きる活力を育むと考えられた。

3) 要介護高齢者のコミュニティを維持または形成するための支援方法の試案

【要介護高齢者のコミュニティに対するニーズ把握】について、要介護高齢者のコミュニティの維持または形成のための支援方法の文献検討では、看護職が捉えた要介護高齢者のコミュニティについてのニーズは、看護職者自身と要介護高齢者との関係を形成する《ケア関係のつながりづくり》、要介護高齢者のケア環境を整える《ケアの仲間づくり》、《ケアの担い手増やし》から、看護職者が要介護高齢者のコミュニティに対するノーマティブニーズとして、ケア資源としての捉え方が見出された。また、要介護高齢者のコミュニティを維持または形成するための実践から導かれた要介護高齢者のコミュニティについてのニーズは、要介護高齢者の訴えにより添う《つながりへの思いを共有》、《つながりへの思いを醸成》、《馴染みの中に新たな“その人らしさ”を期待》、《体調不良がもたらすつながりへのあきらめを払拭》、《つながりを試して“その人らしさ”を発見》が見出された。これらは分析プロセスの性質上、文献検討の結果は、看護職が捉えるノーマティブニーズ、実践から導かれた内容は当事者が捉えるフェルトニーズと位置づけられる。当事者が捉えるフェルトニーズは、要介護高齢者のありたい姿として、ケア目標に位置づけられることから、要介護高齢者のコミュニティを維持または形成するための支援方法として、要介護高齢者のコミュニティに対するニーズを把握することは、ケア目標の明確化につながるため支援の出発点にすることが提案できると考える。

【コミュニティへの参加を支援する方法】について、要介護高齢者のコミュニティの維持または形成のための支援方法の文献検討では、《ケア関係のつながりづくり》、《ケアの仲間づくり》、《ケアの担い手増やし》が実施されていた。また、要介護高齢者のコミュニティを維持または形成するための実践から導かれた支援方法では、《なじみの関係を感じる中での意思表示を喚起》、《つながりへの関心を引き出し》、《自己への信頼を醸成》、《重要な他者への貢献をフィードバック》、《当事者の変化を重要な他者と共有し促進》、《わらしべ長者の発想で仲間づくり》があった。このことは、要介護高齢者自身が、コミュニティとしたい集団や重要な他者に対し、主体的に働きかけることへの支援が実践されていた。このことは、要介護状態であっても、コミュニティを維持または形成する力が潜在していることを示唆している。したがって、要介護高齢者のコミュニティを維持または形成するための支援方法は、要介護高齢者自身が、自ら重要と意識する集団や他者へ主体的に働きかけができることを、要介護高齢者のセルフケアと位置づけ、その支援を行うことと考える。

引用文献

- 河合克義 .(2009). 大都市の一人暮らし高齢者と社会的孤立 . pp69-83 , 株式会社法律文化社 , 京都 .
- 菊池美代志 .(2003). コミュニティづくりの展開に関する考察 - 社会学の領域から - . コミュニティ政策 , 1 , 33-44 .
- 美底恭子 , 大湾明美 , 伊牟田ゆかり , 佐久川政吉 .(2016). 小離島診療所看護師の高齢者の内服自己管理への支援の自己点検 - H 島診療所の看護実践から - . 沖縄県立看護大学紀要 , 17 , 127 - 136 .
- 森下義亜 .(2012). コミュニティ論からみた地域社会参加の構造的課題 : 札幌市の事例から . 北海道大学大学院文学研究科研究論集 , 12 , 375-389 .
- 田場由紀 , 大湾明美 , 佐久川政吉 , 呉地祥友里 , 野口美和子 .(2014). ひとり暮らし要介護高齢者の日常生活におけるストレングス - 社会サービスの活用状況に焦点をあてて - . 沖縄県立看護大学紀要 , 15 , 53-66 .
- 田場由紀 , 大湾明美 , 佐久川政吉 , 呉地祥友里 .(2010). 対応困難事例の事例検討による援助者の変化が援助関係の形成に与える影響 - 在宅要介護高齢者の援助プロセスを通して - . 沖縄県立看護大学紀要 , 11 , 59 - 63 .
- 田場由紀 , 大湾明美 , 呉地祥友里 , 大川嶺子 , 山口初代 , 砂川ゆかり , 野口美和子 .(2019). 文化看護学会誌 , 11(1) , 50 - 58 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	砂川 ゆかり (sunagawa yukari) (00588824)	沖縄県立看護大学・看護学部・助教 (28002)	
研究分担者	山口 初代 (yamagudhi hatsuyo) (70647007)	沖縄県立看護大学・沖縄県立看護大学看護学部・助教 (28002)	
研究分担者	大湾 明美 (ohwan akemi) (80185404)	沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・教授 (28002)	
研究分担者	佐久川 政吉 (sakugawa masayoshi) (80326503)	名桜大学・その他部局等・教授 (28003)	